

日本人海外留学生の留学中の地域交流からの 気づきと帰国後の支援感情

ーコミュニティ感覚に焦点をあててー

阿部 祐子

要 旨

本研究では、日本人学生が留学中の地域社会との交流経験を通して得た気づきが、帰国後の地域社会にどのように関連していったかについて検討した。対象は A 大学から 1 年間の交換留学を終了した日本人学生 12 人で、KJ 法の手法に基づき「コミュニティ感覚」に焦点をあて質的分析を行った。その結果 114 例が抽出され、留学先で地域交流に関わった全員に【地域交流から得た気づき】(77 例)が見られ、帰国後の【支援感情の表出】(37 例)に関連していた。地域社会からの肯定的経験だけでなく困難な経験からの気づきも支援感情へとつながっていた。特に返報性支援感情が多く見られたのが特徴的だった。「コミュニティ感覚」は、大学コミュニティに対して生じていたが、学外に対しては生じていなかった。

【キーワード】日本人学生、海外留学、地域交流、コミュニティ感覚、地域支援

1. 問題の所在と研究目的

グローバル化の推進や少子化による影響を受けて、高等教育機関の在り方は大きく変わろうとしている。政府は「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」(2011)において、日本人学生の海外留学推進のため、大学に対して交換留学制度の拡充とその契機のための短期海外体験制度を奨励している。また「大学自体のグローバル化体制」として、英語での授業、教職員の国際対応力の強化、受入れ留学生の増進などを挙げている。これに伴い派遣留学が推進され、研究も蓄積されている。従来からの継続した関心テーマとしては、第二言語習得や異文化コミュニケーションがあるが(工藤, 2009; 八島, 2004; 中川, 2009など)、最近では短期プログラムとして、ボランティア、インターンシップなど多様な内容が散見され(田中, 2011; 早坂, 2013など)、今後はプログラムの多様化や体制の変化に即した、新たな分野での研究も必要になることが予想される。

A 大学は、学生全員に 1 年の留学が義務づけられ、英語での授業や学内の異文化環境においても「グローバル化体制」が比較的整備されていることから、A 大学からの派遣留学生は、新たな体制のもとでの留学の一例となることが考えられる。また学生は、

入学時から異文化交流に積極的で、留学先での地域交流への期待も高い。そこで、本稿では、A 大学からの派遣留学生を対象に、地域社会との交流について焦点を当てた検討を試みる。最近では短期プログラムでも、地域貢献活動などに焦点を当てたものが増加しているが、予め設定されたプログラムではなく、交換留学の中で、学生が自主的に経験する地域交流について検討することは、意味があると考えられる。横田・白土(2004)は、米国では留学生アドバイザーの教育活動の中で、留学生と米国人学生や地域住民間の交流促進は最重要であるが、日本の大学では 1997 年の留学生政策懇談会まで取り上げられなかったと指摘する。それ以来、日本でも留学生の地域交流に関する実践研究は、頻繁に行われるようになったが(横田・白土, 2004; 阿部, 2009 など)、対象は在日留学生が中心で、日本人の派遣留学生については、短期研修の一部として設定された実践報告以外は見当たらなかった。そこで筆者(2013)では、日本人学生が留学先でどのように地域社会と関わっているかについて、留学前の交流意欲と関連づけながら検討を行った。その結果、交流意欲と実際の交流経験は一致しておらず、交流を望んでも社会的環境が整わずに満足のいく交流ができなかった場合や、

望まなくとも外発的に動機づけられて、肯定的で満足度の高い交流を経験した場合があった。ここから満足のいく地域交流には、個人の意欲や特性だけでなく、社会的環境が大きく影響することが明らかとなった。一方で、期待通りの地域交流ができなかった者も含め、学生の地域社会に対する学びは多々あり、それが帰国後の地域社会に対する関わり方と関連している様子が窺えたが、この点については触れることができなかった。そこで本研究では、課題を「日本人留学生が、留学中の地域社会との交流経験を通して得たことは、帰国後の地域社会にどのように関連していくか」と設定した。留学中の地域交流経験の帰国後の影響を検討することは、多文化化の進む日本の地域社会において、留学経験者が担う新たな役割の可能性を考える契機にもつながるものと考えられる。

研究課題を考えるにあたっては、コミュニティ心理学における「コミュニティ感覚」と「返礼的援助行動」を援用した。Sarason (1974) は「コミュニティ感覚」をコミュニティにおいて「人が信頼でき、容易にアクセスできる相互に支援的な関係のネットワーク」と定義し「コミュニティにとって最も重要な概念」(Sarason, 1974:1)としている。その後 McMilan & Chavis (1986) は「成員が持つ所属感、成員が成員相互あるいは集団に対して持っている重要性の感覚、集団に関わることによって、メンバーのニーズを満たすことができるという信念」と再定義し、①「メンバーシップ」②「影響力」③「統合とニーズの充足」④「情緒的統合の共有」の4つの要素から成る測定尺度を作成した。各要素の概念について、Dalton, Elias, & Wandersman (2001) が詳細に解説しているため、以下ではそれを引用する。①「メンバーシップ」とは、コミュニティのメンバー自身がその一部をコミュニティに捧げており、コミュニティに所属しているという感覚で「コミュニティの境界」「共通する符号システム」「情緒的安心感」「コミュニティへの帰属感とアイデンティティの位置づけ」「個人的投資」の5つの特徴がある。②「影響力」は「メンバーが集団に対して持つ力と集団がメンバーに対して及ぼす集団力動」であり、メンバーとコミュニティは相互に影響しあう連環的な関係である。③「統合とニーズの充足」は、メンバー間での価値の共有と共に資源のやり取りが行われ、個人のニーズの充足が、他者のニーズの充足と結び

ついている。④「情緒的統合の共有」は、メンバー間で価値観や歴史を共有することによる「精神的つながり」である。これは真のコミュニティにとって決定的な要素であり、共有の価値や歴史を強調する重要な出来事によって強化される。

日本での「コミュニティ感覚」に関する研究は、社会学や社会心理学の領域においては、地域性に着目したコミュニティ意識の類型化の研究(田中・藤本・植村, 1978; 石盛, 2010 など)、心理学の領域では、職場や学校など関係性に着目したもの(笹尾・小山・池田, 2004 など)が見られ、いずれもコミュニティ感覚が高いとウェルビーイングが高まることが明らかになっている。

このように「コミュニティ感覚」を身につけることは、理想的な地域社会への参入状態であると考えられることから、この概念は、帰国後の留学生の地域社会への認識を検討するにあたって有効だと考える。本研究の対象者は、1年間の交換留学生であるとはいえ、地域社会との関わりを持つには十分な期間を留学先で過ごすことになり、「コミュニティ感覚」の概念を用いて彼らの気づきを分析することは、妥当性のあることだと考える。

また「返礼的援助行動」は、「被援助者が受けた援助に対して、立場を変えて返礼として援助を提供する行動」で「他者から利益や好意を受けた場合『同程度のものを他者に返すべきだ』とする互惠規範や『援助を通じて生じた不衡平な状態を衡平の状態にもどすべきだ』とする衡平規範に規定され、被援助者が立場を変えて援助を提供するというメカニズム」があるという(高木・妹尾, 2006:27)。高木・妹尾(2006)は、先行研究では過去の援助者に対する返礼的援助のみ検討され(Bar-Tal, 1976; 泉井・中澤, 2010など)、異なる他者に対する研究はほとんどないとしている。本研究は留学中の被援助経験が、帰国後、異なる他者に対する援助につながる可能性が考えられるため、この分野における事例となり得るかも含めて検討したい。

2. 対象者と研究方法

本研究の対象者は、A 県の公立 A 大学から海外協定校に1年間の交換留学をして帰国した日本人学生のうち、留学中に地域交流を経験した12人(男性1人、女性11人)である。留学先は北米4人、台湾2人、独、英、マカオ、香港、メキシコ、タイ

に 1 人ずつであった¹⁾。A 大学は、周囲に店や娯楽施設がほとんどなく、住宅地からも離れた場所に位置する。公共交通機関も限られており、学生は大半がキャンパス内に住んでいる。学生数は 680 人で、地元出身者が 2 割程度、その他は全国各地から集まっている。在日留学生は約 150 人で、大半が協定校 (28 カ国 83 校) からの交換留学生で、欧米系とアジア系の学生の割合は、ほぼ半々である。学生には、1 年次の寮生活、英語での授業、1 年間の留学が義務づけられている。学生は、入学後に英語集中コースを受講して一定の英語力を身につけた後、基盤教育に進み、TOEFL 550 点を超えた時点で留学する (30 単位の単位互換が目標)。協定校は英語圏以外の国も多いが、授業は英語で行われるため、現地語ができなくとも授業に支障はない。現地語運用レベルは、学生によって異なっている。

先述のように本研究では、筆者 (2013) で収集したデータを使用する。データは、留学中の電子メールのやり取りおよび帰国後の半構造化面接を、回答者の合意を得て録音し文字化したものである。面接は 2008 年 10 月から 2009 年 3 月に実施した。本研究は、上記のデータのうち交流を経験した 12 人に対して行った「留学中の地域社会との交流経験を通して、どのようなことを考えるようになったか」という質問に、帰国後の地域社会に関連づけながら回答してもらったものの分析である。

分析方法は、KJ 法 (川喜田, 1967) におけるグループ分けの手法に基づいた質的分析を行った。手続きは、関連のある文章を抽出し、各内容に見出しをつけてカード化した後、類似した内容のものを集めてラベルを付け、小カテゴリーから次第に大きなカテゴリーへと分類した。特定のカテゴリーに分類できない場合は、単独カードとして残した。最後に各カテゴリー間の関連を図式化し解釈を行った。

3. 結果と考察

研究課題の検討のため、関連する 114 例を抽出し、KJ 法でまとめた結果、最大カテゴリーとして【地域交流から得た気づき】³⁷⁷ 例と【支援感情の表出】37 例が得られた (図 1)。以下では、これらのカテゴリーについて説明する。

1 つ目の最大カテゴリー【地域交流から得た気づき】は、《地域に対する気づき》36 例の大カテゴリーとく自分自身に対する気づき>21 例、く支援に対す

る気づき>20 例の中カテゴリーから成る。そのうち《地域に対する気づき》は、さらにくA 県に対する気づき>く大学に対する気づき>くホスト国に対する気づき>の 3 つの中カテゴリーと [日本に対する気づき] の小カテゴリーから成る。第 1 のくA 県に対する気づき>は、[A 県への所属感][A 県への理解と関心の深まり][A 県の人的資源の豊富さへの気づき] の小カテゴリーから成る。第 2 のく大学に対する気づき>は、[大学への所属感][大学への愛着] の小カテゴリーから成る。第 3 のくホスト国に対する気づき>は、[ホストファミリーとの強い絆][ホスト国や人への愛着][ホスト国での日本イメージに対する気づき] の小カテゴリーから成る。またく自分自身に対する気づき>は、[日本人アイデンティティ再確認][キャリアに向けた内省][肯定的変化の自覚][外国人理解の深まり] の 4 つの小カテゴリーから成立し、く支援に対する気づき>は、[支援者としての気づき][被支援者としての気づき][信頼関係の重要性][言語に関する気づき] の 4 つの小カテゴリーから成立する。

2 つ目の最大カテゴリー【支援感情の表出】は、《地域に対する支援感情》25 例の大カテゴリーとく人に対する支援感情>12 例の中カテゴリーから成る。《地域に対する支援感情》は、くA 県への支援感情>の中カテゴリーと [日本への支援感情] の小カテゴリー、2 枚の単独カードから成る。くA 県への支援感情>は、さらに [A 県への積極的支援感情][A 県支援の必要性と使命感][A 県への返報性支援感情] の 3 つの小カテゴリーから、く人に対する支援感情>は、[返報性支援感情][留学生に対する支援感情] の 2 つの小カテゴリーから成立する。

以上の結果をもとに、ここからはカテゴリーの内容について、対象者の語りを引用しながら詳細を検討する。まず、最大カテゴリー【地域交流から得た気づき】を見てみる。大カテゴリー《地域に対する気づき》におけるくA 県に対する気づき>の [A 県への所属感] では、出身県でない A 県を無意識のうちに自分の地域と認識していることや、A 県を弁護している自分に気づいて驚いている様子が語られた。

『日本の冬は?』と聞かれたときに『雪がこんなに積もる』とか『晴れの日がほとんどない』とか知らないうちに A 県のことを話してた (N)

「(大学は)『A 県です』って言うと、すっごいびっくりされるんですよ。『えー』みたいな。



図 1. 留学中の地域交流経験から得たもの

でもその度に『A 県っておいしいものいっぱいあるし人はいいし』みたいな宣伝をして…雪が

多くて自殺者が多いみたいなイメージがすごくあるみたいで『自殺者全国 1 位なんですよ』とかよく言われるんです…『いやこんな X 祭もあるし Y 花火もあるし』って一生懸命 A 県のことを弁護してる自分がいて」(M)

また[A 県への理解と関心の深まり]では、以前は A 県に否定的であった地元出身者が、留学中に小さい町に滞在したことで A 県の評価が変わっている。

「前は早く (A 県を) 出たいと思ってた。大学も本当は県外行きたかったし。でも留学してたとき小さい田舎町がいいっていう人が多くて…私もそうかなって少し思うようになった」(I)

所属地域に対する肯定的な気づきに伴い[A 県の人的資源の豊富さへの気づき]を得た学生もいた。今まで見過ごしていた、地域の人々による大学や学

生に対する温かい支援が可視化され、何もなかったと思っていた地域が、実は人的物的資源が豊富だったことへの気づきが語られた。以下 C を引用する。

「今まで A 県について…何にも僕は目を向けてなかったなあってすごい思い知らされて。『A 県で何やる?』っていったら…『何も無い』という答えができあがってたんですけど、見渡してみたら…『何でもある』と」(C)

また中カテゴリー<大学に対する気づき>では、所属大学を自分の居場所であると再認識し[大学への所属感]を見出している様子や、経験を共有できる仲間がいる場所として[大学への愛着]を再認識している様子が多く語られていた。

「友達に会って、留学中のこととかわかってもらえて、ちょっとほっとした。みんなもいろんなことしてて、聞いてて楽しいし。家族よりもファミリーっていうか…深いところで理解してくれるファミリーって感じですかね」(A)

これは寮生活などにより、接触頻度の高い学生生活を過ごした留学前の経験にもよるだろうが、1年間の留学という共通経験を持つピアに対する共感や信頼関係によるものが大きいのではないだろうか。

小カテゴリー[日本に対する気づき]では、留学先で示された日本への関心や好意的な態度により、日本の良さを再発見し、もっと日本に関する知識を得たいという意欲につながっているのがわかる。例えば J は、台湾で数多くの日本最良の人々と接触することで、日本の良さを再認識している。特に、日本統治時代の人々を中心として活動する「日本語で短歌を詠む会」への参加で、台湾の人々から日本に関する多くの知識を得ている。

「日本語世代の台湾の方の短歌には、ただただ勉強させていただくことが多く、日本人として恥ずかしさを感じることもありましたが…『歴史的仮名遣いで（書けるか）…今日は（日本史上）何があった日か』と聞かれ（てもわからず）…日本の歴史、台湾人の受け継ぐ日本精神というものを教えていただきました」（J）

J は、この経験から日本文化を学ぶ必要性を強く感じている。他にも「留学して日本のこと知らないことがよくわかった」（M）という振り返りや「日本を知らなきゃ何もできない」（C）という貢献への手段としても、自国への知識獲得意欲が語られた。

〈ホスト国に対する気づき〉は、ホストファミリーや地域の人々との肯定的な接触経験に基づくものが多い。以下の B の語りからは、ホストファミリーと親密な関係が築かれ、帰国後も深い絆で結ばれていることが窺える。

「今〇〇（ファミリーの名）は、何やってるかなとか、今頃△△（子供の名）をピックアップしてる時間かなとか、いつもいつも、考えています…時計も向こう時間に合わせて」（B）

また[ホスト国や人への愛着]について、D は買い物や行きつけの店などで、定期的に接触を持った人々との人間関係を以下のように懐かしむ。

「練習してた広東語…次行った時に通じたら、もしその（店の）おばちゃんが（私を）覚えてたら『ああ、上手になった』って言ってくれるかなと思ったりもします」（D）

また[ホスト国での日本イメージに対する気づき]として、台湾、マカオ、メキシコなどでは、日本に対して友好的なイメージがあり、日本人や日本

文化に対する関心も高かったが、欧米では「中国と日本の区別もつかない」（A）「全く関心を示されなかった」（G）のように関心の低さに落胆する様子も語られた。

次に、中カテゴリー〈自分自身に対する気づき〉を検討する。1 番目の小カテゴリーの[日本人アイデンティティ再確認]では、異文化に触れて自分の日本的価値観を再確認したり「がんばってアメリカ人みたいになろうと思っても無理…やっぱ私日本人なんだって思った」（B）のように、同化志向を経た後に日本人としてのアイデンティティを再確認している者もあった。また「日本人としての誇りを台湾の人から教わった」（J）のように人々との交流体験に直結した気づきも見られた。台湾の人々の日本に対する感情を知ることで、日本人アイデンティティへの新たなまなざしが得られたようだ。

帰国と就職活動時期が重なるため、対象者からは、将来のキャリアに対する現実に即した回答も聞かれた。これが[キャリアに向けた内省]である。K や N は、留学中の経験から、自分の目指すことが「日本でもできることかもしれない」と感じ、海外志向であった自分を内省している。以下、引用する。

「とにかく国際ボランティアみたいなことしたくて…いろいろやってみたんですが、やってくるうちに、『別にこれって日本でもできることかも』って思うようになったんですよ。何かそれまでは外国ばかり見てたっていうか。それが今はちょっと成長したっていうか。まず背伸びしないで、できるところからやってってそれが外につながっていくっていうか」（K）

「留学して日本企業に勤めたいと思ったんです。以前は海外で働くことばかり考えていたけど…国際人って別に海外で働くことじゃなくて、日本でもできる」（N）

このようにアイデンティティの再確認や新たな国際的感覚を得たことで、「真の国際人とは何か」「自分は何をすべきか」という成熟した視座が得られている。同時に、人生の分岐点における混乱や迷いも多く語られた。卒業後の進路について、方向性が明確になった者もあれば、何をやりたいのかわからず混乱している者もあった。例えば K は、留学先で地元の NGO や JICA 関係者と共に活発なボランティア活動を行ったが、帰国後、就職活動を控えて、あまりにも多様な活動を行ってきた自分を振り

返り「これまでやってきたことは何なのか、今後は何をしたいのかがわからなくなった」と述べる。この差異は、新たなライフステージに向けた過程のどの地点にいるかによって、個人差が現れた結果だと考えられる。

3 番目の小カテゴリー[肯定的変化の自覚]では、異国で1年間サバイバルしたことへの自信や、物事に積極的になった自分の変化が語られた。

「留学前は、いいかなと思っていたことも、今はやろうかなとか。自分にもできるかなって。地域交流にしても、ボランティアだけでなく、ちょっと話しかけるとか」(I)

4 番目の[外国人理解の深まり]では、自分が外国人としての立場を経験してから、同じ立場の者への理解が深まっている様子が示された。以下では、留学前との違いを感じているIの例を引用する。

「1年生のときとかは、普通に寮とかで話すとか、アシスタントするとかはあったんですけど…こっちの視点から見てて接していたんですけど、やっぱり留学終わってくると、自分が留学生の立場になったので…留学生の立場はわかるようになりました。…(以前は)私は日本人で留学生がなにか困ったこととかがあったらそれを教えるってことはあったんですけど、聞いたことだけを教えるみたいな感じで、相手の心理を思ったりとかは全然しなかった…」(I)

一方、ボランティア活動中に、自分の持つ偏見を自覚した衝撃について、Kは以下のように語る。

「(山岳民族の人が)『彼氏が〜で』とか…すごく楽しそうに話していて…『あ、何だ、みんな同じなんだ』って…。私の中で山岳民族だからって見下していた部分があったのかもしれないです。…たぶんタイ人に対してもそういう面が…軽く見ているみたいな。例えば欧米系の人とかを見ると、それなりに構えてくるけれども『どうせタイ人なんだからこれは大丈夫だろう』とか。で、見下すというか、差別というか。…自分で『私差別してる!』って思いました。で、すごく嫌で…『うわ〜!』って」(K)

この偏見への気づきは、これまでのKの国際ボランティアとしての姿勢やキャリアに向けた内省へと発展している。

次の中カテゴリー<支援に対する気づき>では、留学生の関心や立場を理解した上で、以前とは異な

った関わり方や支援をしようとする姿勢が見られる。第1の小カテゴリー[支援者としての気づき]では、特に相手を個として認識するようになったことが多く語られた。「日本人」「外国人」という集団としてではなく、個人として関わってくれた人々との肯定的な経験や、反対に集団の一部でしかなかったという否定的な経験の、双方からの気づきがみられる。工藤(2009)もこの点については、留学における重要な効果として言及している。以下、Cの否定的経験からの気づきを引用する。

「地域支援として小学校とかにボランティア…行くと、アジア人として中国人も韓国人も日本人もみんな一緒なわけですよ…(自分は)アジア人じゃなくて〇〇(自分の名)なんだって言いたかった…『日本人は〜ですか?』って聞かれて、自分はこうだけど人は知らないって。やっぱり日本人はみんな一緒って思われてるわけで。まあそういうのって自分にもありますけどね。アメリカ人はこうとか」(C)

Cの気づきは、相手をステレオタイプの中で捉えていた自身への内省にも及んでいる。帰国後の自分自身について「留学生と話すとき〇〇人じゃなくて、マイクとかポールとか、その人と話すっていう感じになったと思います」と述べている。

[被支援者としての気づき]では、これまで当然と思っていたA県からのサポートや大学からのサポートが意識され、支援に対する感謝や支援によって初めて地域交流が可能となることへの気づきに及んでいる。Mは、大学の仲介役としての重要性を以下のように述べる。

「地域の人っていうのは、大学を通しての地域の人だったんですよ…イベントもあった。地域の人と交流するイベント。でも、大学が主催してくれたから知り合えた地域の人はいくらいた。大学が仲介してくれないと、地域の人との交流とかが、まずない」(M)

次の2つの小カテゴリー[信頼関係の重要性][言語に関する気づき]も上記に関連している。Hは、信頼関係を築くことで、支援が可能となることを経験に基づいて以下のように述べる。

「まずベースに…友情っていうか、個人間の信頼感とか、そういうのが生まれて自然と『紹介してあげるよ』とか…『留学生に〇〇してあげよう』とかそういうのじゃなくって

…何か一緒にしたいなって思えることが自然に他の国の人も起こるんだって…昔はそんなことは考えついたこともなかった」(H)

また、コミュニケーションには言語能力が前提となるという認識にも変化が見られた。留学による言語の上達は自覚されているものの、多くは言葉より気持ちが重要であり、英語の上達より積極性や支援感情を重視している。以下の D の言及は、回答中に気づきが得られている様子がわかり興味深い。

「親しい話も英語でできるようになって、外国語しゃべるのに抵抗がなくなった…向こうからアメリカ人とか歩いてきて困ってたら、たぶん前だったら『ああ、困ってるな』っていう具合だったんだけど『あ、困ってるんだったら何か助けてあげようかな』と思うようになった…うまくしゃべれなくても、もし例えば中国人で『中国語全然しゃべれないけど、使える中国語でやってみようかな』とか。もし困ってて…完璧に言語を、例えば中国語を喋れなくても、手使ったりとかでも何でも伝わればいい」(D)

次に、もう 1 つの最大カテゴリーである【支援感情の表出】について検討する。大カテゴリーの《地域に対する支援感情》については、対象者の所属大学の所在地である〈A 県への支援感情〉が最も多く言及されていた。留学という貴重な機会を与えてくれた大学の財政基盤ともいえる A 県への感謝は[A 県への積極的支援感情][A 県支援の必要性和使命感][A 県への返報性支援感情]の 3 つの下位カテゴリーによって表される。このような支援感情が芽生えたのは、A 大学が公立大学で、地域の反対を押して設立されたという事情を学生が認知していたことも理由として挙げられよう。以前は認知していても、それが具体的な感情や態度に結びつきにくかったが、留学中に周囲からの支援の重要性を身を以て経験したことで自覚が深まり、何らかの形で恩返しをしたいという返報性の支援感情へと発展したとは考えられないだろうか。ただその思いには温度差があり「ありがたい」「感謝している」など漠然としている者、「ふるさと納税で恩返ししたい」「高齢者と共に活動をしたい」など具体的な実践案を示す者、さらに「駅前活性化のプロジェクトに参加」「A 県を元気にする活動に応募」「地域支援のためのクラブを設立」など、既に実践を行っている者などさまざまであった。また[A 県支援の必要性和使命感]で

は、「人口減少率や自殺率が全国でも際立って深刻などの望ましくない現状が、地元メディアで頻繁に取り上げられることから「他の地域に比べて特に支援が必要な A 県」というイメージが形成され、それが何とかしなければという使命感に結びつく様子が窺えた。それは県外出身者からも言及された。

「地元より深刻な問題多いし…高齢化とか自殺率高いとか。何かしないといけない」(M)、「A 県の若者はどんどん流出しているじゃないですか。もう自分がやらなきゃ誰がやるんだ的な…スピリットというか…精神は出てきたと思いますね」(N)、「(出身県)は、大丈夫だけど A 県は支援が必要」(A)などは、県外出身者によるものである。

次の小カテゴリー[日本への支援感情]は、先述した[キャリアに向けた内省]や[日本人アイデンティティ再確認]と関連した支援感情である。日本人としての自覚、国際性やキャリアについての内省から「日本でも何かできるかもしれない」「日本で貢献することが、グローバルにつながる」という新たな視座を得ている。例えば、N は「自分は日本人で、日本のために何かしないとという気になった」と述べる。また、留学先で得た自己効力感から「自分にも何かできるかもしれない」(I)、「海外でできたのだから、日本でならもっとできるはず」(D)という漠然とはしているものの、以前と比べて積極的な支援意図も表明された。

もう 1 つの中カテゴリーである〈人に対する支援感情〉では、[返報性支援感情]として「留学先の人がしてくれたように、自分も誰かに何かをしてあげたい」(H)、「たくさんの肯定的な経験に対する恩返しをしたい」(J)という返報性による支援感情が窺える。また[留学生に対する支援感情]では「留学生の立場がわかった今だからこそ、留学生を支援したい」(I)と感じており、ここでも具体案や実践案を伴ったものから漠然としたものまでが見られた。

以上で述べてきた支援感情が、間接的な返報性のものであったのに対して「留学先でお世話になった人たちに何かをお返ししたい」という、直接的な返報性支援への言及も単独カードとして見られた。ただし、これは特定の個人に対するものではなく、ボランティア活動を継続することで社会的に還元したいというものである。直接的な返報性支援感情が少なかったのは、留学中の人間関係において、彼らが被支援者の立場だったからではないか。自国にもど

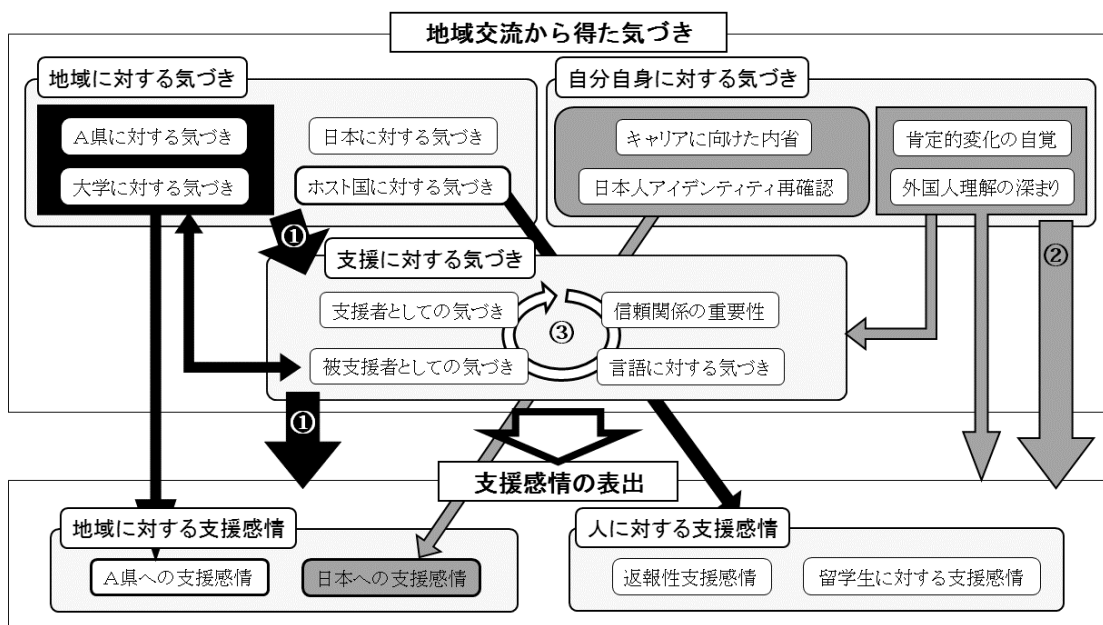


図2. カテゴリー間の関連

り、支援者となりやすい状況において、留学時の自分と似た立場の人を支援することで、間接的に支援を返したいと考えたと推察される。以下の語りには、それがよく表現されている。

「(留学中に) こんなにいい思いして、いろんな人に助けられて、もうこんなにすごく親切にされたら、いくら自己中な私でも、もう誰かに何かしてあげなくちゃたまらないっていう気持ちが出てるような感じになった」(B)

以上、留学中の地域交流経験から得られた気づきや感情についての詳細を説明してきたが、ここからは各カテゴリー間の関連を図式化し、解釈を行う。

図2は、図1のカテゴリー間の関連の主なものを矢印で示している。全体的には【地域交流から得た気づき】によって【支援感情の表出】が生じたという流れが見られるが、それは3つに整理される。

第1のカテゴリー間の関連として《地域に対する気づき》は《支援に対する気づき》を経て、支援感情へつながることが示唆された(図2①)。地域に対する新たな気づきから、肯定的な認識が生まれ、それが周囲からの支援への自覚と支援の在り方に対する内省を促し、支援感情へと発展している。このうち《地域に対する気づき》の下位カテゴリーである《A県に対する気づき》と《大学に対する気づき》は、《被支援者としての気づき》と相互関連が見られ、また《A県への支援感情》にも直結していた。つまり、

A県や所属大学への肯定的な気づきと、そこから受けた支援への認識とが相互作用することで、感謝の気持が生じ、支援感情に発展したのではないかと推察される。また、留学中の《ホスト国に対する気づき》からは《人に対する支援感情》が生じていた。ホスト国に対する肯定的な気づきだけでなく、否定的な気づきも、帰国後、誰かを支援したいという感情につながったと考えられる。

第2に中カテゴリー《自分自身に対する気づき》は、支援感情に直接関連していたが、下位カテゴリーにおいても関連が見られた(図2②)。まず、留学先で獲得した[肯定的変化の自覚]や自身の[外国人理解の深まり]が、支援感情に関連していた。外国人の立場を経験し他者へのエンパシーが高まったことに加えて、自信や積極性が身についたという自覚から、積極的な支援への表明が見られる。この2つのカテゴリーは、支援はどうあるべきかという《支援に対する気づき》にもつながっていた。また[キャリアに向けた内省]と[日本人アイデンティティ再確認]は、支援感情の中でも[日本への支援感情]に関連していた。留学前には、漠然とした海外志向が強かった学生にとって、留学時のボランティアや国際交流などの経験が現実を見据えた視点を開く契機となり、身近な地域や自国での活動がグローバルな活動につながる可能性や、自分ができることから始めようとする発想の転換が見られる。

最後に中カテゴリ〈支援に対する気づき〉では、カテゴリ内での相互関連が見られた(図 2③)。留学先での被支援者としての経験により、自国でも被支援者であった自分に気づききっかけとなったようだ。また、受けた支援を通して[信頼関係の重要性]や[言語に関する気づき]など、自身の支援態度への内省がもたらされていた。

4. 総合的考察と今後の課題

以上、留学中の地域交流経験からの気づきが、帰国後の地域支援感情に関連したことを述べてきたが、ここからは、これを筆者(2013)の結果に照らし合わせ「返礼的援助行動」の観点から検討した後、「コミュニティ感覚」との関係について論ずる。

筆者(2013)では、地域交流意欲が高くとも満足はいく交流ができなかった者とその逆の者があったことを前述した。本稿では、交流経験者の帰国後の地域社会への関わりについて検討したが、留学中の交流経験に不満だった者も含め、地域交流に関わった全員に帰国後の地域社会に対する肯定的な認識が見られ、それが地域を支援したいという感情へと発展していた。肯定的経験については、それを感謝して受けとめた上で『お返ししたい』という返報性の支援感情が発生していた。一方、否定的な経験からは、困難だったからこそ相手の立場への理解が深まり、それが支援感情につながる様子が見られた。交流経験自体に満足を感じずとも、それが反面教師的な働きをすることで、結果的には地域交流に対する新たな気づきをもたらしていた。

特徴的だったのは、支援感情の原動力が、恩返しをしたいという返報性のものだったことである。この支援感情を「返礼的援助行動」から考えると、「他者から受けた好意を他者に返すべきだ」とする「互惠規範によるメカニズム」に該当し、「留学先で自分が受けた好意を、帰国後に外国人や地域社会に対して返したい」という「相互作用のなかった他者に対する将来の援助行動」についての1つの事例となることが考えられる。

このような返礼的援助行動に動機づけられるに至ったのは、対象者が留学という異文化体験を通して精神的な成長をとげ、自分は「社会の成員としての権利と義務を持った一市民である」という自覚が芽生え始めたからとはいえないだろうか。加藤(2014)は、留学の目的として政府の掲げる「グ

ローバル人材の育成」に対して「グローバル市民の育成」を提案している。そこには、地球レベルの諸問題に対処する主体的に行動する自己イメージと、共同体の改善への倫理観が求められ、地球への貢献は、自分が暮らす地域や街からの具体的な行動から始まるとしている。本稿で見られた気づきを、市民性醸成の過程において、今後、所属コミュニティでの自己の在り方を模索し、共同体の改善への地道な行動につながる可能性として捉えることは意味の在ることだと考える。

ここで改めて「コミュニティ感覚」の枠組みをもとに考察したい。本稿の対象者は留学期間も短く、留学中に「コミュニティ感覚」を得るまでには至らなかったかもしれないが、帰国後の所属大学においては、それが生じていると考えられるのではないか。McMilan & Chavis (1986)の4つの概念に基づいて検討してみると、①「メンバーシップ」に関しては「大学に戻ってホッとした」「自分の居場所である」「ファミリーという感じ」などの「情緒的安心感」や「コミュニティへの帰属感とアイデンティティの位置づけ」が見られる。②「影響力」に関しても、地域支援に向けたクラブの立ち上げ、実践活動に対するピアや後輩の勧誘、教職員との協働など、大学内の集団や組織に同調しながら相互に影響を及ぼしている様子が見られた。③「統合とニーズの充足」では、留学という異文化経験で得た新たな価値観が帰国者間で共有され、それを肯定的に位置づけようとする個人と他者のニーズの充足が結びついていると考えられる。④「情緒的統合の共有」では、留学経験を含めた挑戦的な学生生活を共に過ごしたことが「重要な出来事や問題を共有し解決すること」に該当し、それにより一体感や仲間意識などの「精神的つながり」が芽生えているといえるのではないか。

しかしながら、大学の外枠となるA県という地域コミュニティに対する「コミュニティ感覚」は、未だ生じているとは言い難い。A県に対する否定的言及を弁護し、無意識のうちにA県について語る自身への気づきなどは、地域コミュニティへの帰属感とアイデンティティの位置づけが深まりつつあることの一例とも見られ、①「メンバーシップ」の中の「情緒的安心感」や「コミュニティへの帰属感とアイデンティティの位置づけ」は、促進されていると考えられるが、③「統合とニーズの充足」④「情緒的統合の共有」などの価値の共有や精神的なつな

がりはまだ見られない。②「影響力」は、地域支援に向けた実践活動が、今後実際にどのような相互影響を及ぼすかを見ていく必要があるだろう。

以上、本研究からは、留学時の地域交流から得られた気づきが、帰国後のコミュニティ感覚につながる可能性、また蓄積された気づきが、将来の地域社会との関わりの中で、何らかの形で還元される可能性が窺えた。多文化社会における地域住民と外国人との関係を考える上でも、このような経験者の有効な活用が、在日留学生や外国人への支援につながるものと考えられる。そのためには、今後も留学の効果を長期的な視点で捉えることが必要だろう。最後に本研究は、都市部から離れた地方の公立大学を対象としており、プログラムの特殊性からも、得られた知見が即座に一般化されにくいという限界を持つ。しかし、加速する大学の国際化の現状を鑑みると、これも今後の大学の在り方を再考する一助となり得るのではないかと考える。

注

1. 対象者の特定を避けるため属性データは表示しない。
2. 大学の情報は調査時の2008年10月のものである。
3. 本稿ではグループ化から得られたカテゴリー名について最大カテゴリーを【 】大カテゴリーを《 》中カテゴリーを〈 〉小カテゴリーを〔 〕で表記する。

参考文献

- 阿部祐子 (2009) 「共通課題の達成による親密化の深まりについて-多文化クラスにおける地域参加の事例から-」WEB版日本語教育実践研究フォーラム報告。
- 阿部祐子 (2013) 「日本人短期海外留学生の地域社会への参入-面接法による質的データ分析の試み-」『コミュニティ心理学研究』16(2), 178-192。
- 石盛真徳 (2010) 『コミュニティ意識と地域情報化の社会心理学』ナカニシヤ書店。
- 泉井みずき・中澤潤 (2010) 「被援助に対する返報-諸研究の概観と発達研究への展望-」『千葉大学教育学部研究紀要』(58), 73-77。
- 加藤恵津子 (2014) 「グローバル人材かグローバル市民か-多様な若者の多様な海外渡航のススメ-」『留学交流』(34), 1-11。
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』中公新書。
- 工藤和宏 (2009) 「日本の大学生に対する短期海外語学研

- 修の教育的効果-グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察-」『スピーチコミュニケーションに基づく教育』(22), 117-139。
- 笹尾敏明・小山梓・池田満 (2003) 次世代型「ファカルティ・ディベロップメント (FD) プログラムに向けて-コミュニティ心理学的視座からの検討-」『国際基督教大学学報。I-A, 教育研究』(45), 55-7。
- 高木修・妹尾香織 (2006) 「援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性」『関西大学社会学部紀要』(38), 1, 25-38。
- 田中國夫・藤本忠明・植村勝彦 (1978) 「地域社会への態度の類型化について-その尺度構成と背景要因-」『心理学研究』(49), 36-43。
- 田中義郎 (2011) 「留学プログラムの多様性-拡大する海外インターンシップ・プログラムとその戦略-」『留学交流』(23), 2-5。
- 中川典子 (2009) 「短期海外語学研修における参加者の気づき-異文化理解教育の観点から-」『流通科学大学論集-人文・自然編』(21), 2, 37-60。
- 早坂寛子 (2013) 「海外インターンシップ留学における事前教育指導の在り方-英語面接指導方法を中心に-」『留学交流』(26), 1-7。
- 文部科学省 (1997) 「今後の留学生政策の基本的方向について」留学生政策懇談会第一次報告。
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/015/toushin/970701.htm (2015年6月10日)
- 文部科学省 (2011) 『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』産学連携によるグローバル人材育成推進会議。
- 八島智子 (2004) 『第二言語コミュニケーションと異文化適応-国際的対人関係の構築をめざして-』多賀出版
- 横田雅弘・白土悟 (2004) 『留学生アドバイザー-学習・生活・心理をいかに支援するか-』ナカニシヤ出版, 226-256。
- Bar-Tal, D. (1976). *Prosocial behavior. Theory and research.* New York: Halsted Press.
- Dalton, J. H., Elias, M. J., & Wandersman, A. (2001). *Community psychology: Linking individuals and communities.* Stamford, CT: Thomson Learning. (笹尾敏明(訳)2007『コミュニティ心理学』金子書房)
- McMillan, D.W. & Chavis, D.M. (1986). Sense of community: Definition and theory. *Journal of Community Psychology*, (14), 6-23.
- Sarason, S.B. (1974). *The Psychological sense of community: Prospects for a community psychology.* San Francisco: Jossey-Bass.

あべ ゆうこ／国際教養大学 国際教養学部
yukoabe@aiu.ac.jp

Willingness to Support Community as a Consequence of Awareness Developed by Japanese Study Abroad Students

— Focusing on the Sense of Community —

ABE Yuko

Abstract

This paper investigates types of awareness developed by study abroad students through the involvement in local community activities, and the relationship between these types of awareness and transformation of the way students perceive their local communities. The study uses the theoretical framework of “sense of community”. The data regarding the study abroad experience was collected through semi-structured interviews with 12 students upon their return to Japan after a year of study abroad. The outcome of qualitative analysis shows that students gained new perception of their surrounding communities, of themselves, and of the support systems, as a result of their study abroad experience. Also the experience changed their willingness to support local community activities after they return from abroad. The sense of community grew within the university community, but not outside of the university. However, there is a noticeable tendency toward positive community development even in the wider community.

【Keywords】 Japanese university students, study abroad program, community involvement, sense of community, community support

(Department of International Liberal Arts, Akita International University)